

今、憲法問題を語る —憲法問題対策センター活動報告—

第5回 品川正治氏 講演会「戦争・人間 そして 憲法9条」

憲法問題対策センター事務局長 伊井 和彦 (37期)

1 戦争経験者として

品川正治氏は、日本興亜損害保険株式会社の社長・会長を歴任し、経済同友会の副代表幹事・専務理事等を務められ、現在は経済同友会終身幹事・財団法人国際開発センター会長もされている著名な経済人であるが、近年、80歳を過ぎてから、自らが経験した戦争の悲惨さと平和の大切さを率直に語り、憲法9条2項は断じて守らなければならないという立場で、各地で講演をしたり著書を書かれている。

東京弁護士会の憲法問題対策センターでは、日本国憲法第9条の意義をあらためて確認するために、悲惨な戦争と終戦そして日本国憲法の誕生を目の当たりに体験してこられた先人のお話を聞く会を定期的に催していくつもりであるが、品川氏はまさにそのような語り部として貴重な存在であり、今回の講演会も、センターの方で企画し、東京弁護士会主催の講演会として、2008年11月5日に弁護士会館クレオで開催されたものである。

2 二度と戦争をしない、その意味での「終戦」、そして憲法第9条

品川氏のお話は、死ぬまでに読んでおきたい本を読み漁ったという旧制三高の学生時代に始まり、あえて一兵卒として従軍した当時の覚悟、鳥取連隊に入隊してわずか2週間で中国戦線に送られ現地で経験した悲惨な戦争の実態等、どれも興味深く、また感動的なお話であったが、とりわけ、私の心に残ったのは、終戦後に品川氏が中国の俘虜収容所で経験された、元日本軍兵士間での「敗戦か、終戦か」という論争である。

陸軍士官学校出身を中心としたエリートたちは、「終戦」という呼び方は卑怯だ。敗戦であり、負けたの



だから、勝つためにもう一度戦う、国に血判状を出す」と血気盛んだったという。それに対し、品川氏をはじめ前線で本当の戦闘を経験してきた人たちの多くは、「終戦で結構だ。もう二度と戦争をしない、絶対に他国に兵を出すような国であってはならない」という気持ちだったという。そして、「終戦」派の人たちは、復員船の中で、新しい日本国憲法の草案が発表された新聞を読み、9条の戦争放棄の条項が入っているのを見て、みな感激し快哉を叫んだという。

3 受け継いでいく者として

現実に悲惨な戦場の最前線を経験してきた人の「二度と戦わない、だから終戦。そのための憲法9条」の言葉は、「戦争を知らない子供たち」であった私たちの胸にも深く突き刺さる。現実脅威排除論や武力均衡平和論等、現実主義と言われる近年の憲法9条改正論者たちの論理が、いかに実際の戦争を知らない非現実的なものであるか、品川氏の講演を聞けばよく分かる。私たちができることは、まず、その思いを受け継いでいくことである。胸に熱い思いがこみ上げてきた、講演会の一夜であった。